

「中国哲学史B」講義ノート

岩本憲司

〔第一回〕

本講義では、中国の哲学・思想のうち、特に、孔子以来、二千年以上の歴史を有し、日本にも多大な影響を与えた儒教・儒学について、その經典の概要を説明した上で、その展開のあとをたどる。一般に、儒学の歴史は、「經学史」とよばれ、大きく三つの時期、つまり、(一)漢・唐の訓詁学、(二)宋・元・明の性理学、(三)清朝の考証学、に分けられるので、本講義でも、ほぼこの時代区分に従うことにする。ところで、中国の古典を扱う場合、必ず参考になければならないのが、中国最古の図書目録、『漢書』芸文志である。この書は、単に書名等が羅列されている目録ではなく、当時、どのよう

な学術が存在し、それらがどのように分類されていたか、つまり、当時の学術の全体像が読み取れる貴重なものだからである。

そこで今、この「芸文志」を見るに、まず大きく、(一)六芸略(二)諸子略(三)詩賦略(四)兵書略(五)数術略(六)方技略に六分類されている。このうち、儒教の經典が著録されているのは(一)六芸略であるから、そこを見ると、更に、①易②書③詩④礼⑤楽⑥春秋に下位区分され、附録として、論語・孝經・小学(文字学)がある。本講義では、これからしばらく、この「芸文志」の区分・順序に従って、個々の經典を説明してゆくことにする。

〔第二回〕

『易』は、「芸文志」で六經のトップに置かれているが、本来は、単なる占いのテキストであって、儒家とは関係がなかった。古くは、連山(夏王朝)・歸藏(殷王朝)・周易(周王朝)の三種の易があつたと言われるが、伝説に過ぎない。「易」という名称については、易簡(たやすい)・変易(かわる)・不易(かわらない)という、後漢の鄭玄の所謂「易の三名」の解釈があるが、これはあくまで思想的解釈であって、事実としては、占師のトレードマークが蜥蜴(トカゲ)であつたことから来たらしい。『易』の構成は、經(本文部分)と伝(解説部分)との二つからなる。このうち、前者は、

陰・陽二種の爻（こう）を六本組み合わせた六十四卦（文様）と、卦辞・爻辞（占いの判断の言葉）であり、後者は、十翼（象伝上下・象伝上下・文言伝・説卦伝・序卦伝・雜卦伝・繫辭伝上下）である。なお、翼は助けるの意である。また、繫辭伝は特に哲学的で、大伝とよばれる。この十翼は、孔子の作とされているが、内容・文体ともに、かなり多様で、長い間、多くの人々によって、次第に出来上ってきたものである。十翼の成立によって、『易』は始めて、儒教の經典となった（漢初）。なお、一般に、六經にはすべて、孔子が手を入れたという伝説が附随している。儒教の祖が孔子とされているからである。

【第三回】

「易」が本来は占いの書であり、儒家とは関係がなかった証拠として、次の三つがあげられる。第一は、『論語』に「易」が登場しないということである。一箇所だけ述而篇に「五十以学易」とあるが、これは、

同音の「亦」の仮借として下文につづけて読むべきものである。第二は、『荀子』において、「易」は経の中に数えられていない、ということである。その勸学篇にあげられているのは、礼・楽・詩・書・春秋である。第三は、『史記』にあるように、秦の始皇帝の焚書を免れたということである。もし儒教の經典であつたら、焚かれていただろう。『書』は、諸帝王の詔勅集であり、同じ歴史ものでも、『春秋』が事の書であるのに対して、言の書である。孔子が整理編集したというのは伝説だが、『論語』によれば、孔子が教材として使用していたことは確かである。漢代には、伏生の伝えた『今文尚書』（今文字つまり隷書で書かれたテキスト）と『古文尚書』（古文字で書かれたテキスト）とがあつたが、のちに、後者は失われた。ところが、東晉の時代になって、梅賾が、孔安国の伝（注釈）をつけた『古文尚書』を献上した。これが現行の『尚書』五十八篇である。

【第四回】

しかし、その中、今文と共通する三十三篇は本物であつたが（真古文）、のこりの二十五篇はにせ物であつた（偽古文）。また、孔安国の伝は、すべてが偽作であつた（偽孔伝）。このことを明らかにして、清朝考証学の學風を興こしたのが、閻若璩の『尚書古文疏証』である。ちなみに、年号「平成」の典故である（大禹謨）は、偽古文にあたる。『書』の構成は、虞夏書九篇（堯舜禹）、商書十七篇（湯）、周書三十二篇（文武）で、その内容は、堯・舜の禪讓、禹の治水、湯・武の放伐、周公旦の功業などであり、一貫する思想は、天命思想で、これは、『孟子』の易姓革命の思想に影響を与えている。なお、『書』は、所謂「加上法」によって作られていると考えられる。つまり、「周書」の中の幾篇かは、周初（BC十世紀）のものだが、以後、数百年にわたって、「周書」↓「商書」↓「虞夏書」という逆の順序で次々に作られ、最終的には、戦国末から秦

漢にかけての時期に成立したものであろう。ちなみに、『加上法』は、日本の富永仲基が、仏教思想の成立に関して見出したもので、その『翁の文』に「おほよそ古より道をとき法をはじめもの、必ずそのかこつてて祖とするところありて、我より先にたてたる者の上を出んとす」とある。日本神話にも認められる。

【第五回】

『詩』とは、『書』と同様に、普通名詞でなくて、固有名詞。中国最古の詩集で、三百余篇ある。昔、三千余篇あったのを、孔子が整理したという、所謂『孔子刪詩説』は、伝説に過ぎないが、『書』と同じく、孔子が教材として使用していたことは確かである。孔子の時、すでに三百余篇だったようであるが、いつ誰が編集したかは不明。

『詩』の構成は、(一)国風、(二)小雅・大雅、(三)頌である。国風は、十五カ国の民謡である。小雅・大雅は、世俗的な宴会の際に歌われたもので、雅は正の意である。頌は、宗教

的な儀式の際に歌われたもので、先祖の功德をほめる。ちなみに、『風雅の道』という言葉は、ここから出ている。なお、単なる詩集を經典とするために、各篇には小序〔解説〕がついているが、恋歌を道徳的な戒めの歌としたり、無名作家のものを昔の聖賢や有名人の作としたり、無理なこじつけも多い。ちなみに、全体の総論である大序は、日本の『古今和歌集』の仮名序にも影響を与えている有名なもので、特にその中の「手の舞い足の踏むを知らず」は、よく知られている。なお、漢代には、魯詩（申公）・齊詩（轅固生）・韓詩（韓嬰）・毛詩（毛公）の所謂四家詩があったと言われるが、前三者〔三家詩〕は亡び、現存するのは「毛詩」だけである。

【第六回】

「礼」という言葉は本来、宗教的祭祀や世俗的宴会の場合の行礼の器〔礼物〕を意味したが、次第に礼物の意味はなくなり、終には儀容の意味に変化した。しかも、これ

に伴って、特定の場合のものではなく、人倫日常の作法行儀となった。なお、礼は、孔子に於いては、道徳的内面化と政治的制度化との二つの傾向が並存していたが、前者を發展させたのが孟子であり〔礼義〕、後者を發展させたのが荀子であり〔政教〕、のちに主流になったのは、後者の方である。

ところで、「礼」に関する經典には、『周礼』・『儀礼』・『礼記』の所謂「三礼」がある。『周礼』は、古来、周王朝の政治機構をそのまま写し取ったものであると考えられてきたが、現代の目から見ても、このことは到底信じられない。おそらくは、周代の官制を部分的には折り込んでいるものの、大部分は創作であろう。つまり、官制の理想像をえがいたもので、その成立も、戦国末期あたりと考えられる（前漢末にまで引き下げる説もある）。『儀礼』は、古代中国に於いて官吏階層の者たちが、ハレの場で取る行動の規定を記したもので、全部で十七篇、大きく、冠昏・鄉射・朝聘・喪・祭に分けられ、現在、我々が使用している

「冠・婚・葬・祭」という言葉は、ここから出ている。

【第七回】

なお、『儀礼』については、儒教の經典としては極めて珍しい例であるが、一九五九年に武威で発見された漢墓（ほぼ前漢末から王莽期）から、漢簡が出土している。したがって、『儀礼』は、資料としての価値が非常に高いと言える。成立は、おそらく、戦国時代あたりであろう。

『礼記』は、成立事情が複雑で、『隋書』経籍志等の資料の記述を、そのままのみにとは出来ないが、とにかく四十九篇が伝わっている。内容は、『儀礼』のように実用を主とするものではなくて、もっぱら礼に関する理論が述べられている。ちなみに、儒教の經典には、経―伝（記・書）―注（箋）―疏（正義）というランクがあり、経の解説が伝（記・書）、その解説が注（箋）、そのまた解説が疏（正義）というように、多層をなしている。つまり、『礼記』の「記」

は、この「記」なのである。したがって、礼の解説・理論ということになるのである。なお、下の春秋三伝の「伝」も同じで、『春秋』経の解説ということになる。

楽については、始皇帝に焚かれたという説もあるが、音楽というものの性格を考えれば、『楽経』は、どうやら最初から存在していなかったらしい。ただ、『礼記』の中に「楽記」篇があり、これは音楽の解説である。

【第八回】

春秋時代、列国では、史官のもとに国家の大事の公式記録が蓄積されていたようであり、それらは、『孟子』離婁下篇に「晋の乗」・「楚の檣杙」・「魯の春秋」とあるように、それぞれ独自の名称で呼ばれることもあったが、『墨子』明鬼篇に「周の春秋」・「燕の春秋」・「宋の春秋」・「斉の春秋」とあるように、通じて「春秋」と呼ばれた。年歳に従って記録されたことから、本来年歳を意味する「春秋」（春夏秋冬の略）が呼称として使用されたものと思われる

る。これらの年代記は残存していないが、『春秋』経から、あるいは、戦国時代のものだが、『竹書紀年』から、その体裁をうかがい知ることが出来る。また、『国語』楚語上・晉語七に、「春秋」を学習し、教えた、という記事があり、これによって、春秋学成立以前の、「春秋」の利用法も知ることが出来る。さて、このような「春秋」の利用法は、過去の歴史を現在への鑑戒として見ると、素朴な段階のものであったが、その後、儒家の間に、「春秋」に関する全く別の觀念が生じてきた。それは、『孟子』滕文公下篇・離婁下篇に始めて見えるもので、孔子は、魯の年代記「春秋」を筆削して「書きかえて」、「春秋」経を作り、そこに大義（自分の政治上の理想）をこめた”というのである。

【第九回】

現代の目から見れば、『春秋』経は、多少整理の手が入っているにせよ、魯の年代記「春秋」がほぼそのまま伝わったものとし

か言えないが、当時の儒家は、「春秋」と『春秋』との間に、孔子を介在させ、『春秋』経という理念上の存在を設定したのである。

かくて、対象はこの『春秋』経にうつり、それにかかわる営爲も、学習し、教える、

ということから、孔子がこめたとされる大義を解明する（一種の暗号解読）、という複雑な経学的営爲に変化し、ここに所謂『春秋学』が成立した。そして、その最初の成果が、漢の景帝期に出現したと思われる『公羊伝』である。ところで、春秋学の場合、暗号を解くコード（義例）の設定は自由であるから、解読の結果は恣意的なものとならざるを得ない。そのため学派の分裂は避けられず、宣帝期になると、対抗勢力によって、『穀梁伝』が提出された。なお、『春秋』は本来、年代記であり、事件が記されているから、その事件の詳細を検討することによって間接的に大義を明らかにする、という別の方法が案出されてもおかしくない。実際、前漢末になると、戦国時代に集められた史話・説話集を資料として『春

秋』経を解く書物が出現した。それが『左氏伝』であり、以後、『公羊伝』の好敵手となった。

【第十回】

儒教の經典に関する創造的解釈にもとづく注釈を中心とした、二千年にもわたるものろの知的営爲を「経学」と呼ぶ。その本質を一言で規定するのは難しいが、あえていえば、総合を方法とし致用を目的とする国家学である。経学は前漢武帝期の董仲舒に始まった。それは、儒教の国教化が彼の武帝への「対策」によるものであったからだ。その対策は実は彼自身の春秋公羊学にもとづくものであった。かれの学問は、先行の儒家はもちろん、道家・法家・墨家・陰陽家などの思想をも取り入れるという、総合を方法とし、また、春秋漢代制作説に明らかなように、致用を目的としていて、経学の本質を始めて備えたものであった。いま『漢書』によって董仲舒以後の状況をみると、奏議や詔書中に経義が盛んに

引かれていて、経学が致用という所期の目的を確実に達成していったことがわかるが、まとまった著述となると、『芸文志』によるかぎりその教はきわめて少ない。これは一経を専門として堅く師法を守り、更にその経の中の一派に属して家法を守って私見を立てないという、前漢期を特徴づける学風によるものであろう。ちなみに、武帝のとき五つであった博士の教（五経博士）は次第にふえ、元帝期には十四博士にもなった。

【第十一回】

前漢も末になると、経学に変化が生じた。その一つは、哀帝・平帝の頃といわれる「緯書」の出現である。本来、緯（横糸）とは経（縦糸）に対する言葉であり、緯書とは経書を補うものの意であって、これにかかわる営爲は経学の一環として捉えることができるが、今日、断片でのみ伝えられている緯書を見ると、その内容は休祥災異による予言の類や感生帝説・異常風貌説な

ど神秘的要素に満ちみちている。実は、このような神秘的要素の充満は前漢末という時代そのものの風潮なのであって、ここにもそのときどきの風潮を貪欲に取り込んでいくという経学の総合性が如実に示されている。もう一つは、劉歆にかかわると思われる古文経伝の出現である。十四博士が奉じた今文経伝（当時通行の文字で書かれたもの）に対して、これは古文（秦以前の旧体文字）で書かれていたとされ、武帝の末年に孔子の旧宅の壁の中から出てきたとされる。出自にいかがわしさが伴うものの、彼の運動によって、古文経伝は一時的にはあるが学官に立てられたりもした。そして、古文経伝の出現以後、経学は今文字と古文とに二分され、二学は文字の相異、テキストとその解釈の相異、依拠する経伝の相異、さらには思想（特に孔子と六経との関係）の相異によって、ことごとに対立・抗争することになる。

〔第十二回〕

前漢の経学が師徒相伝の一経専門を守ったのに対して、後漢の経学は数経に通じ、数家を兼ねることが多くなった。このような傾向が生じたのは、総合を方法とする経学の本質からしてきわめて自然ななりゆきであった。そして、最終的には、鄭玄によって、今文学（緯書を含む）と古文学という、つねに対立してきた二学でさえ総合されることになった。

魏晋・南北朝時代の経学は、鄭玄という權威に対する追従と反抗という二つの道をたどることになる。反抗は、内部から真正面に批判するという方法と、外部から異質のものを取り込むという方法とによって行なわれた。前者の代表は魏の王肅である。後者はさらに二つに分けられる。一つは道家の思想を取り込んだもので、魏の何晏『論語集解』、王弼『周易注』などがある。もう一つは、降って南北朝に入り仏教の思想を取り込んだもので、梁の皇侃『論語義

疏』などがある。ところで、南北朝には、経学の傾向も南北に二分した。『詩』と『礼』については両朝とも鄭玄注によったものの、その他の経伝については、南朝では『易』は王弼注、『書』は偽孔伝、『左伝』は杜預注、北朝では『易』『書』は鄭玄注、『左伝』は服虔注といったように、それぞれ別のものを用いたのである。

〔第十三回〕

つまりは、先にあげた二つの道のうち、南朝は反抗の道を、そして北朝は追従の道をたどった。これは一応、革新と保守という風土にもとづく南と北との気質の相異によるものと言えようが、特に北朝については、異民族から入った北魏の孝文帝の徹底した中国化政策の結果とも考えられる。

隋唐代の経学の展開は、何といっても『五経正義』の選定という事業に代表される。「正義」とは国家公認の解釈という意味であるが、唐の太宗が孔穎達らに命じて、五経について当時に伝えられていた最良の

注「解釈」と最良の疏（注の注、つまり再解釈）もしくは次善の疏を選択し、全体を疏通させたものである。この事業の意義は、一つには、仏教の精緻な義疏の学に触発されて、南北朝後半に発展した、経注を細密に解釈していくという義疏を集大成したところである。ただし、同時にこれは六朝の旧疏の消滅ということでもあった。もう一つは、南北に大きく二分していた経学を統一したことである。ただし、『五経正義』に採択された注は、いずれも南学の系統に属するものであって、内実としては南学に一本化されたのである。なお、『五経正義』は科挙の明経科の試験の基準とされたことも付言しておかなければならない。

〔第十四回〕

唐の『五経正義』で頂点に達した経学は「訓詁学」と呼ばれ、細かな字句の詮索に重点を置くものであったが、宋になると、大きな社会変動にともなって、経学内部にも新しい傾向が生じてきた。それは、『五経正

義』の解釈を排し、经文自体に即して合理的解釈を施そうとするものであり、新しいということから「新儒学」と呼ばれたり、始まった時代から「宋学」と呼ばれたり、内容から「性理学」（性や理を論ずる学問）と呼ばれたりする。また、代表格の二人、宋の朱子と明の王陽明から、「朱子学」・「陽明学」と呼ばれる。朱子は、理は人間の本性として内在すると同時に、外界の事物にも在る、という立場で、「性即理」を主張し、これに対して、王陽明は、宇宙の理法や人間の倫理は心の中に既に在り、事物の理が心内の理と独立に存在することはない、という立場で、「心即理」を主張した。なお、朱子は、それまで尊重されてきた五経にかえて、『論語』・『孟子』それに『礼記』中の二篇（大学）・（中庸）を加えたものを、「四書」として、儒教の經典の中心に据え、それぞれに注をつくった。ちなみに、この四書を中心とする朱子学は、日本の儒学（特に江戸期）に多大な影響を与えた。

〔第十五回〕

明末の混乱の中で、東林党などの経世の実学が現われ、明の滅亡と異民族支配下に、それを受け継いだのが、王夫之・顧炎武・黄宗羲らの民族主義者である。彼らは、経世の実学を論ずるのに、経書・史書を重視し精密な論証によって客観的真理を明らかにするという科学的実証的な方法を用いた。その後、清朝の文化政策によって、その経世致用の思想や反満感情は抑圧されたが、客観主義的な（実事求是）の側面はますます発展し、乾隆・嘉慶時代に「清朝考証学」として花開いたのである。この学は、宋・元・明の性理学の主観唯心的な学風を排して、漢・魏の経学を尊重したが、実証を支えるため、校勘学・目錄学・書誌学・輯逸学など文献学を充実させると共に、天文・曆学・算学の自然科学や言語音韻・諸子学・金石学・歴史・礼制度の人文・社会学系の研究も幅広く推進し、その成果は、現在の我々の学問にも有益である。